2L3-OS-26a-2

身体相互行為における参与の多重性
Multiplicity of Participation in Embodied Interaction

坂井田 瑠衣[*1, 2]
Rui Sakaida

諏訪 正樹[*3]
Masaki Suwa

[*1] 慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科
Graduate School of Media and Governance, Keio University

[*2] 日本学術振興会
Japan Society for the Promotion of Science

[*3] 慶應義塾大学環境情報学部
Faculty of Environment and Information Studies, Keio University

In this paper, we review and discuss the embodiment of social interaction from the viewpoint of the multiplicity of "participation". First, referring to Goffman's discussion of participation [Goffman 81] as a point of departure, we review the relationship between the embodiment of interaction and the multiplicity of participation in "conversational interaction". Second, we expand the focus of discussion into "embodied interaction", i.e., cooperative work via body movement, and foresee the theory of "multiple participation framework in embodied interaction" as our future work.

1. 問題の所在

社会的相互行為の参与者の立場は，日常的には「話し手」「聞き手」といった単純な区別によって捉えられがちである．しかし実際には，「話し手」や「聞き手」は，それぞれ多様な参与者としての立場に解体して捉えることができる[Goffman 81] (2 節以降で詳述)．さらに，それらの多様な参与の立場は，同一人物によって同時に担われることがある．これが，相互行為参与の多重性である．この多重性が生じる背景には，相互行為の身体性が関与している．相互行為には参与者の身体が介在しており，そのことが相互行為の展開に様々な影響をもたらすことが古くから論じられてきた (e.g. [Goffman 63][Goodwin 81][Heath 86])．本発表では，社会的相互行為における身体性を，参与の多重性という観点から捉え直す．

本発表で照準したい社会的相互行為は 2 種類ある．すなわち，「会話相互行為」と「身体相互行為」である．会話相互行為とは，言語的および (視線や身振りのような) 非言語的やりとりによって，参与者たちの相互理解を達成する過程のことである．他方，身体相互行為とは，(道具の受け渡しや身体への施術のような) 身体動作同士のやりとりによって，何らかの共同作業を達成する過程のことである．診療や制作，調理などの場面に多く見られるものである．一般に相互行為という表現からは，会話相互行為を想定する場合が多いが，本発表では身体動作による共同作業の過程も「相互行為」として捉え議論したい[坂井田 15]．

本発表では，まず，会話相互行為への参与に関する Goffman の議論[Goffman 81]を出発点に，会話相互行為の参与が多重性を孕んでいることを確認し，その背景には身体性が多分に関与していることを，Goffman 以外の先行研究の知見も紹介しながら再考する．その後，筆者らが近年進めてきた身体相互行為研究の事例を紹介し，そこでの参与の多重性を議論する．会話相互行為にとどまらない身体相互行為に探究対象を拡張してみると，特徴的な身体的参与の姿が見られることを例証する．これにより，身体相互行為研究における「多重的参与構造」を理論化するための見通しを示す．

連絡先：坂井田瑠衣，慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科／日本学術振興会，神奈川県藤沢市遠藤 5322，lui@sfc.keio.ac.jp，http://web.sfc.keio.ac.jp/~lui/

2. 「話し手」と「聞き手」の解体

社会学者 Erving Goffman の議論[Goffman 81]には，会話相互行為における参与の多重性が描き出されている．

2.1 「話し手」の解体

我々が「話し手」という表現を用いる時，多くの場合，いくつかの参与者としての立場を一括りに捉えている．すなわち，実際に会話の場で話している発声者 animator，発言内容を選択する著者 author，発言内容の責任主体 principal という 3 種類の立場である[Goffman 81]．これらの立場は，多くの場合に同一人物が担うが，例えば誰かの発言を引用して話す場合や，台本や原稿が用意されている演劇やニュース報道などにおいては，異なる参与者によって分担されている (3.1 で詳述)．この意味で，「話し手」の参与のあり方は多様であり，多重性を帯びている．

2.2 「聞き手」の解体

会話の「聞き手」にも，以下のような多様な参与地位 participation status[Goffman 81]が存在する (図 1)．まず「聞き手」は，「会話への参与を承認された ratified 聞き手」と「会話への参与を承認されていない unratified 聞き手 (＝立ち聞き者 overhearer)」に分けられる．さらに前者は，発言を直接宛てられている「受け手 addressee」と，発言を直接宛てられていない「傍参与者 side-participant」に分けられる．後者は，「傍観者 bystander」と「盗聴者 eavesdropper」に分けられる．

多くの場合，「話し手」は 2.1 で述べた複数の立場を担っているのに対し，「聞き手」は単一の参与地位を担っていることが一般的に想定されるであろう．しかし，日常生活に埋め込まれた会話[高梨 08]という観点からは，同一人物が複数の参与地位を担うことによる聞き手の多重性も想定される．例えば同一空間で複数の会話が並立して生じている場合 (multifocused gathering[Goffman 63])，ある会話の「承認された聞き手」が別の会話の「承認されていない聞き手」であるという多重的状況もありうる．そのような場では，一方の会話から別の会話に割り込むというような現象も生じうる[高梨 11] (3.2 で詳述)．

以上のような意味で，聞き手の参与のあり方も話し手と同様に多様であり，多重性を帯びることがある．

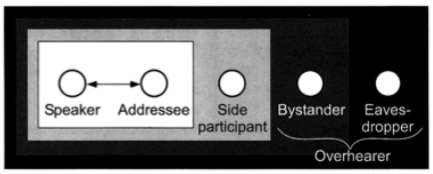

図 1: 会話の参与構造 ([坊農 04], p. 216 より転載)

3. 「話し手」と「聞き手」の多重性を生む身体

前節で述べたような，会話における参与の多重性は，相互行為の実際的な展開の中で生み出され，維持され，時には解消される．その背景には，会話参与者が互いの身体に首尾よく志向する過程が存在する．

3.1 「話し手」の身体的多重性

まずは，会話参与者たちの身体的志向によって維持される「話し手」の多重性を検討する．ここでは，話し手が過去の経験を語る中で，会話の場にいない他者の発言を引用し，「演技」をする場面を想定してみよう．演技における「話し手」は，(演劇場面でそうであるように)「発声者」であるが「著者」ではない．すなわち，実際には別の人物 (著者) によって発せられた発言を，話し手 (発声者) が再現している，という多重性が存在する．

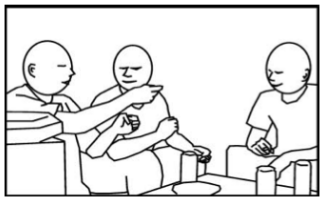

図 2:「演技」への志向 ([西阪 09], p. 67 より転載．
右から参与者 A, B, C．身振りを正面に先鋭化して
演技する C の身体を A と B が見つめている)

西阪は，ある参与者 B が語っていた物語の (架空の) 続きを別の参与者 C が語るという場面を例示し，話し手の語りの展開に対する聞き手の身体的志向を微視的に観察している[西阪 08][西阪 09]．ここでは，話し手の「演技」における多重性が，話し手自身の身体の上に表われ，聞き手もその多重性に志向していることが示唆されている．西阪が示した場面 (図 2) では，話し手 C が「引用」の形式を用いて「演技」を行う時，C は自らの視線と演技に伴う身振りを正面に向ける．C は，「五番アイアン貸せって」という引用の形式 (「って」) を用いつつ，ゴルフクラブを握って前方の人物に振り下ろす動作によって，自らの前方に「想像の空間」を構築するとともに，視線と上体の向きを聞き手である A と B の方向から逸らすことで，A と B を「想像の空間」の外部に位置づける．他方，「(C の) 志向が身体の規範的構造に照らしてきわめて先鋭的なものであるにもかかわらず，聞き手である A と B は，いずれも，その志向が示されるほうを向くことはなく，あくまでも，C の身体に顔と目を向けている」([西阪 09], p.68, () 内は筆者による補足)．つまり，もしこれが演技であることが認識されないならば，A と B は，C の先鋭的な志向が示されている手の先や，C の前方に拡がる「想像の空間」へと視線を向けていた可能性がある，ということであろう．このことは，「今まさに C の視線と身振りは「演技」に志向している」ということを，A と B が認識していることの現れである．

この事例では，話し手の多重性が単に話し手の (引用という) 発話形式や身振りに顕在化するだけではなく，聞き手が (視線という) 身体的モダリティを適切に志向させて応じている．この意味で，「発声者」と「著者」という多重性は，話し手と聞き手の身体を媒介して間主観的に達成されるものである．

3.2 「聞き手」の身体的多重性

会話の参与構造理論[Goffman 81](図 1) からは，まず「話し手」と「受け手」が中心的な参与者として存在し，その周囲に傍参与者，さらにその外側に立ち聞き者が存在するという，同心円的なイメージが喚起されやすい[高梨 11]．しかし日常生活では，例えば複数の会話が同一の時空間に生じているという場面もしばしばある[Goffman 63]．高梨は，複数の会話が生じている場面において，ある会話の「承認された参与者」が，(参与を承認されていない) 別の会話に割り込むという現象を観察している[高梨 11]．そこでは，ある会話の承認された参与者が，別の会話の参与者の身体的振る舞いを観察し，その会話に「割り込む」というやりとりから，聞き手の多重性が生じていることが分かる．

高梨の観察した事例は，同一空間で複数の「班」が翌日の実験の準備をしている際に，それらの班ごとに別々の会話が生じている場面である．ある班 (「教示班」) の会話において教示班のメンバー (「坂崎」) が，別の班の名称 (「キャリブレーション班」) を言及した時，隣接して作業しているキャリブレーション班のメンバー (「筑紫」) が教示班に向けて発話することで，教示班の会話に割り込む．その際，「キャリブレーション班」を言及した坂崎は，キャリブレーション班に向けて大きくポインティングをしており，筑紫がそのポインティングに気づくことで，教示班の会話に割り込んでいる．ここで坂崎の視線はあくまでも教示班内の参与者に向けられていることから，ポインティングは発話のアドレスをキャリブレーション班に向けるためのものではない[1]．この意味で，この時点で筑紫は (身体的にも)「立ち聞き者」である．筑紫が教示班の会話に割り込んだ直後，筑紫は坂崎に視線を向け，坂崎も筑紫に視線を向ける．ここで，筑紫は教示班の会話への参与が身体的にも承認されるとともに，遡及的にそれまでは立ち聞き者であったことが際立たせられるであろう．

筑紫はキャリブレーション班から見れば「承認された参与者」であると同時に，教示班から見れば「立ち聞き者」であるという点で，聞き手としての多重性が見られる．このように日常生活に埋め込まれた会話では，聞き手の多重性が生じることも珍しくないと考えられ，その背後に当事者たちの身体的志向が存在する．

4. 身体相互行為への多重的参与

西阪や高梨の観察が示唆したことは，会話参与における多重性は，参与者たち自身の当座の身体的志向によって生み出され，維持され，あるいは解消されうるという点である．

筆者らはこれまでに，調理場面や医療場面を例題として，身体動作を主要モダリティとして構成される共同作業，すなわち「身体相互行為」における相互行為連鎖の研究を進めてきた[坂井田 15][坂井田 16][坂井田 投稿中]．会話参与の多重性が身体性に強く裏打ちされることを前提にするのであれば，医療や介護，制作等のフィールドにおける共同作業の参与構造を (少なくとも部分的に) 会話相互行為のアナロジーで捉えることができるだろう．同時に，会話相互行為の枠組みでは捉えきれない側面を指摘し，身体相互行為の参与構造理論として精緻化することが今後の課題である．

以下，会話でも見られたような，「同一人物の身体に生じる参与の多重性」という観点から身体相互行為の特性を考えるために，筆者らの歯科診療場面における観察事例を引用する．

[1] ただし，坂崎は大きな動作でポインティングしているため，坂崎がキャリブレーション班に気づかれうることを認識していた可能性もある．

4.1 「話し手」と「施術者」,「受け手」と「対象物」

事例 1 は，歯科医師 (D; dentist) と患者 (P; patient) のやりとりである．医療場面において，患者は診療を受ける局面に達すると，「自分自身を関与の焦点となるように仕向け，(中略) それによって視覚的な注意や精査を受ける対象物 (object) になる」([Heath 86], p.77)．歯科診療場面においても，患者が会話の「受け手」から診療の「対象物」へと参与地位を徐々に転換する場面が見られる[坂井田 投稿中]．

事例 1[2]

```
01  D:  あの:::  飲み↑込んだの
02      >たぶん n<=1 日半ぐらいなはず(や)で
03      下から出てき↑とるで:,
04  P:  #+((nod))
    d:   +ミラー持ち上げる->
    図: #①
05  D:  まあほかっ+#てっ*てい#い[け+ど:.
06  P:                          [((nod))
    d:  --------->+#ミラー接近---->+ミラー挿入
    p:                  *目を閉じて口を開く
    図:             #②        #③
```

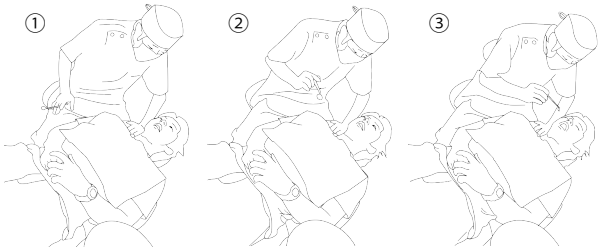

図 3: 事例 1 における歯科医師と患者の動作の変遷

事例 1 は，診療の冒頭において，歯科医師が患者の口内の状態について説明し (01〜03 行目)，教示を与えている (05 行目) 場面である．同時に歯科医師は，右手に持っていたデンタルミラーを持ち上げ (04, 05 行目)，患者の口に接近させている (06 行目)．ここで患者は，歯科医師の振る舞いに対し，極めて順応的な反応を見せる．患者は 01〜03 行目の歯科医師の発言に対し，04 行目で頷くことで，発言の「受け手であること recipiency[Goodwin 81][Heath 86]」を示している．ところが，その直後に歯科医師が教示を与えながらデンタルミラーを患者の口に接近させる．すると，患者は口を開いて眼を閉じつつ (図 3-③)，まだ完了していない教示に対して頷くことで，引き続き発言の受け手であることを示す．

この場面で歯科医師は，「患者に説明と教示を与える」という点では「話し手」として参与しつつ，「デンタルミラーを口に接近させる」という点では，「施術者」として参与を開始している．ここで，歯科医師という同一人物の身体の上に，いわば多重な参与地位が表出されていることになる．患者はこれら歯科医師の多重な参与地位に追随し，口を開いて眼を閉じることで診療の「対象物」になりつつ，発言の「受け手」であることをも維持する．この意味で，患者という同一人物の身体の上にも，「受け手」と「対象物」という多重的な参与地位が表出されている．

ここに，身体相互行為における多重的参与構造の理論化に向けた一つのモデルを描くことができるだろう (図 4)．当初は「話し手」と「受け手」として参与していた参与者それぞれの身体の上に，「施術者」と「対象物」という参与地位が表出され始め，最終的には「話し手」と「受け手」という参与地位は (見かけ上) 消失する．このモデルと上述した会話の多重性との共通点および相違点については，5 節で再考する．

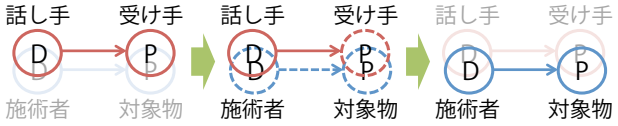

図 4: 事例 1 における多重的参与構造

4.2 「話し手」と「施術者」,「傍参与者」と「補助者」

次は，同一人物の身体において同時に複数の立場が表出するという点で事例 1 と共通点があるものの，参与者が 3 者になることによって，多重性がより複雑化する事例を示す[坂井田 16]．事例 2 では，歯科医師が患者に当日の治療の方針を説明しており，傍らには歯科衛生士 (H; hygienist) が参与している．

事例 2

```
01 D: 今日もう一回 今日膿出して薬出しますけど:
02    (0.3) あとでもっかい u- 前回のレントゲン
03    見+せますけど: そんな希+望持つような
   d:   +器具に手を伸ばす--->+器具引き寄せる->
04    話や+な†くてもう (.) 今度+ひどい目に
   d: --->+両手で調整--------->+ホールド->
   h:          †タオルを片付ける
05    逢いますか+ら (0.8)
   d: --------->+器具を置きに行く->
06    う:+ん=ちょっ†と中膿+み出しますから
   d: -->+器具を置く----->+別の器具を持ち上げる
   h:                  †タオルを取りに行く-->
07    †(0.5)
   h: †タオルを両手で持つ->
08 H: タオ†ルしますね: (0.5) 失礼します
   h: --->†タオルを P の顔にかける
```

言語的やりとり (黒字部分) のみを観察してみると，01〜06 行目では歯科医師が患者に治療の方針を説明しており，歯科衛生士は発言しないという点で，ここでは，歯科医師が「話し手」，患者が「受け手」，歯科衛生士が「傍参与者」の参与地位にある．

他方，身体的やりとり (灰字部分) を観察してみると，全く異なる参与のあり方が浮かびあがってくる．歯科医師が「見せますけど:」と言いながら診療器具に手を伸ばし，「希望持つような」と言いながら器具を手元に引き寄せる (03 行目) と，歯科衛生士はそれに呼応するかのように，手に持っていたタオルを片付ける (04 行目)．このタオルは患者の顔を覆うために歯科衛生士が手元に準備していたものである．ここでは，歯科医師が 03 行目で手に持った器具がタオルを必要としない診療工程に使用する器具であったため，歯科衛生士は当座の局面ではタオルが不要であることを認識し，手に持っていたタオルを片付けている．その後，歯科医師が手に取った器具の間違いに気づき，別の

[2] トランスクリプト記号の詳細は以下のとおりである．「=」は発語同士の密着，「(0.0)」は無音区間の秒数，「(.)」は 0.2 秒以下の短い無音区間，「[ ]」は発語の重なりの開始／終了地点，「言葉::」は音の引き延ばし，「言-」は言葉の途切れ，「>言葉<」は発語のスピードが速い箇所，「<言葉>」は発語のスピードが遅い箇所，「↑」は音調の上昇，「(言葉)」は聞き取りが確定できない発語，「( )」は聞き取り不可能な発語，「(( ))」は注記を示す．また小文字の d, h, p の行には，D, H, P の身体動作が記述される．「+」は歯科医師の動作の変化点，「†」は歯科衛生士の動作の変化点，「-->」は同一動作の継続，「#」は図の位置を示す．

器具を持ち上げようと器具を置く (06 行目) と，歯科衛生士もそれに呼応するかのようにタオルを再び取りに行き (06 行目),「タオルしますね:」と言いながら患者の顔にタオルを掛ける (08 行目). ここでは，歯科医師が診療の「施術者」として診療器具を手元に準備しており，歯科衛生士が診療の「補助者」としてタオルを準備している. ここに，歯科診療という活動の性質に依存した参与構造の多重性が見られる (図 5).

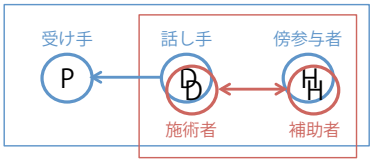

図 5: 事例 2 における多重的参与構造

ここで，「会話」の展開という意味では，歯科医師と患者が (「話し手」と「受け手」という) 主たる参与者であり，歯科衛生士はそれらのやりとりを脇で聞いている「傍参与者」である. 他方，「診療準備」の展開という意味では，歯科医師と歯科衛生士が「施術者」と「補助者」として，中心的な動きを見せている. この点で，「話し手」，「受け手」，「傍参与者」という「会話」の参与構造とは異なる「診療準備」の参与構造が，会話の参与構造と並行して出現していると言えるであろう.

5. 多重的参与構造の理論化に向けて

事例 1 では，(歯科医師という) 同一人物の身体の上に，(「会話」と「デンタルミラーの接近・挿入」という) 異なる複数の焦点が表出する際，参与者たちは (発語・デンタルミラー／開口・閉眼・頷きという) 複数モダリティを適切に配分することで，その多重性を成立させていた. 特に歯科診療場面における患者には「口を開くと話せない」という身体的 (あるいは物理的) 制約が課されており，その意味で，図 4 で示したような段階的な参与構造の遷移を，適切なモダリティ配分によって組み立てることが要請されていたと考えられる.

事例 2 においても，(「会話」と「診療準備」という) 異なる 2 つの焦点が出現し，それぞれの焦点について同一人物の身体の上に複数の参与構造が生起するという実情が描き出された. 特に事例 2 は 3 者による多人数インタラクションのため，構造がより複雑化している. 他方，それらは 3.2 で見たような同一空間に生じる複数の会話[Goffman 63][高梨 11]のように，別々の参与者によって組織されるものではない. 2 者 (以上) の参与者，すなわち歯科医師と歯科衛生士が重複しているため，会話と診療準備のどちらか一方の組織化が他方に強く干渉するという相互依存的な関係にある. 実際，事例 2 では歯科医師が手に取るべき道具を誤り (03 行目)，その誤りを認識する過程で動作のよどみが生じている (04 行目). この時，歯科医師は患者に対して強い口調で諭すように患者の症状についての説明を与えている (01～05 行目) ことから，会話への強い志向が認知的制約となって動作の誤りとよどみが生じたとも考えられる. このことが，単に歯科医師の動作の修正[坂井田 16]に終始せず，補助者として参与していた歯科衛生士の行為連鎖にも影響を与えている. この潜在的な認知的制約を描こうとしたのが，図 5 においてまさに (「話し手」と「施術者」の) 重なりによって表現した部分である. その意味では，例えば歯科衛生士の「傍参与者」と「補助者」については，双方の立場が適切に保たれたままに展開されやすいからこそ，歯科衛生士は歯科医師の動作の修正に適切に追随できた可能性もある. このような個別の参与地位同士の両立可能性にも，その組み合わせによって差異があると考えられる.

両事例の観察から検討すると，会話相互行為の参与構造を身体相互行為に適用しようとした際に不足するのは，「同時並行しつつ相互依存的に展開する複数の焦点がもたらす身体的／認知的制約」という視点である[3]. その視点が反映されているのが，図 4 や図 5 において，文字通り重なって描かれた部分である. 複数の焦点が同一人物の身体の上に表出されるというマルチモダリティを孕むため，このような同時的構造とその制約を問題にする必要がある. 今後は，身体相互行為における多重的参与構造の理論化に向けて，このような事例観察に基づき，「重なり」を含んだ参与構造の記述を蓄積する見込みである.

謝辞

本発表の草案を議論していただいた LC 研究会の参加者各位に感謝する. 本発表は，慶應義塾大学博士課程学生研究支援プログラム，慶應義塾大学森泰吉郎記念研究振興基金の助成による研究成果の一部である.

参考文献

[坊農 04] 坊農真弓，鈴木紀子，片桐恭弘: 多人数会話における参与構造分析 —インタラクション行動から興味対象を抽出する—，認知科学，Vol. 11, No. 3, pp. 214-227 (2004)

[Goffman 63] Goffman, E.: *Behavior in Public Places: Notes on the Organization of Gatherings*, The Free Press (1963)

[Goffman 81] Goffman, E.: *Forms of Talk*, University of Pennsylvania Press (1981)

[Goodwin 81] Goodwin, C.: *Conversational Organization: Interaction between Speakers and Hearers*, Academic Press (1981)

[Haddington 14] Haddington, P., Keisanen, T., Mondada, L., Nevile, M. (Eds.): *Multiactivity in Social Interaction: Beyond Multitasking*, John Benjamins (2014)

[Heath 86] Heath, C.: *Body Movement and Speech in Medical Interaction*, Cambridge University Press (1986)

[西阪 08] 西阪仰: 分散する身体，勁草書房 (2008)

[西阪 09] 西阪仰: 活動の空間的および連鎖的な組織 —話し手と聞き手の相互行為再考—，認知科学，Vol. 16, No. 1, pp. 65-77 (2009)

[西阪 13] 西阪仰，早野薫，須永将史，黒嶋智美，岩田夏穂: 共感の技法 —福島県における足湯ボランティアの会話分析，勁草書房 (2013)

[坂井田 15] 坂井田瑠衣，諏訪正樹: 身体の観察可能性がもたらす協同調理場面の相互行為 —「暗黙的協同」の組織化プロセス—，認知科学，Vol. 22, No. 1, pp. 110-125 (2015)

[坂井田 16] 坂井田瑠衣，榎本美香，伝康晴，坊農真弓: フィールドに依存した身体相互行為の組織化過程 —歯科診療における「修正」のやりとり—，人工知能学会研究会資料，SIG-SLUD-B503, pp. 17-22 (2016)

[坂井田 投稿中] 坂井田瑠衣，諏訪正樹: 受け手になるか対象物になるか —歯科診療における参与地位の拮抗と相互調整—，社会言語科学 (投稿中)

[高梨 08] 高梨克也: 会話構造理解のための分析単位 —参与構造—，人工知能学会誌，Vol. 23, No. 4, pp. 538-544 (2008)

[高梨 11] 高梨克也: 複数の焦点のある相互行為場面における活動の割り込みの分析，社会言語科学 Vol. 14, No. 1, pp. 48-60 (2011)

[3] この視点は，近年の会話分析研究で注目されつつある「複合的な活動 multiactivity[Haddington 14][西阪 13]」という概念と問題意識を共有しているが，多重的参与構造理論の体系化という観点からは，検討が十全に進んでいるとは言えない.